

第2章 現地レポート

1. 高校授業見学レポート

森下みゆき 54

2. 小学校訪問レポート

中丸 満 58

1. 高校授業見学レポート

森下みゆき

本調査の調査対象校4校のうち、3校で授業見学を行った。学校を訪れた3月は、韓国では新学期が始まったばかり。見学時は、新学年になってまだ数回目という授業だった。見学した授業は表1のとおりである。

表1：見学した授業

学校	学年	男子/女子 クラス*	科目
A校	1年生	女子	「英語」
C校	2年生	男子	「英語Ⅰ」
D校	1年生	男子	「英語」

*C・D校は共学だが、クラスが男女別となっている。

高校での授業時間は50分間。見学した授業はどれも習熟度別クラスの授業であった*1。C・D校は35～36人、A校は16人という少人数で授業が行われていた。1年生は「英語」、2年生は「英語Ⅰ」の授業を見学した。以下、その内容をもとに、ソウルの高校での英語の授業の様子を、3校に共通してみられた点を中心に紹介する。

英語で英語を教える (TEE:Teaching English in English)

まず、3校に共通してみられた点としてあげができるのは、英語で英語を教える授業が行われていたことである。3校とも授業担当者は韓国人の英語教員。単語の意味の確認や補足説明をしているとき以外は、ほとんどすべて英語で授業が進められていた。生徒たちは、教員の指示や説明を集中して聞いており、投げかけられる質問にもよく反応していた。

韓国では、2001年より教育人的資源部(2008年に教育科学技術部に名称変更)が英語の授業を英語で行うことを奨励、ソウル市教育庁でも、1週間のうち1時間は英語で授



この日、D校では、関係代名詞のまとめをやっていた。先生からは、次のようなグループ・ワークの課題が出されていた。“You need to write down a sentence with one period, but you have to use several relative pronouns.”

*1 詳細は資料編 1. 調査対象校の概要P.64参照。

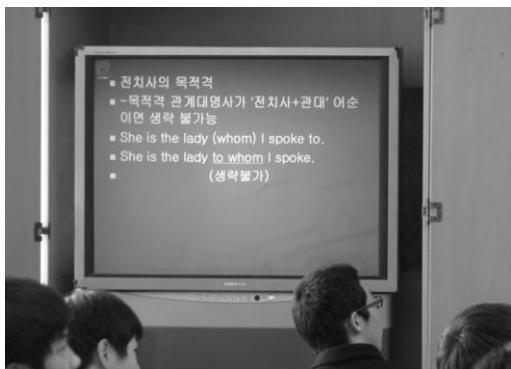
業を行うよう奨めている。3校でもすべての授業が今回見学したように英語で行われているわけではないが、英語による授業を担当する教員をおくなど、それぞれの学校で積極的に対応する姿勢がみられた。

ICTの活用と手作り教材

また、教室に入って目を引いたのは、大きなモニター（またはスクリーン）であった。C校、D校では、コンピューターとモニターをつなぎ、教員がコンピューターを操作しながら、教材をモニター上に映し出して授業を進めていた。



PCを操作しながら授業を進める（C校）。板書は説明をする際などに補足的に使われる程度だった。



モニターに映し出された教材。関係代名詞の説明をまとめたスライドは教員が作成したもの（D校）。

教育でのICT活用が進む韓国では、小学校の英語の授業用に、教科書と連動した専用ソフトが開発されており、小学校ではそれに沿って授業が進められていたが、高校では、教室用教材は、教員が教科書の内容をもとにプレゼンテーションソフトを使って作成しているとのことだった。

教科書の内容に沿った授業

この日見学した授業の内容は、A校ではスピーチングとリスニングの活動が、D校では文法の確認が中心に行われていたが、3校ともに、教科書の内容に沿ったものであった。韓国の高校の英語の教科書は検定教科書となっている。3校ではそれぞれ違う教科書が使用されていたが、どの教科書（B5判）も300～330ページと日本の教科書に比べてかなり厚い（P.57補足：教科書について参照）。この教科書を1年間の授業で終わらせるこもあり、授業はテンポよく進められていた。特にC校とD校での授業のスピードはかなり速く感じられた。3校の中から、C校でのこの日の授業の流れを紹介する（表2）。

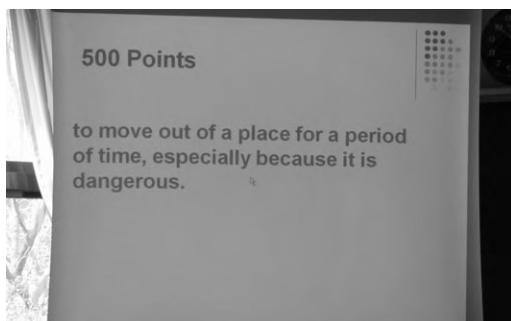
表2：C校：この日の「英語Ⅰ」授業の流れ

1. 挨拶
2. 表現の復習（教科書）
3. グループ対抗クイズ
(教科書から、新出単語や文章の並べ替え、読解問題などをクイズ形式にした先生の自作教材)
4. 単語ワークシート
5. 教科書本文の読解
—CDで本文を聞く
—英語でのQ&Aで本文の内容をチェック

第2章 現地レポート

挨拶のあと、この日の授業の目標（Lesson2のKey Expressionを使うこと、ダイアローグを理解すること）を確認。

前回の授業の復習をしてから、Lesson2の本文に入る前に、Key Expression や新出単語などを確認するため、グループ対抗のクイズが行われた。生徒たちはあらかじめ5～6人のグループで座っており、このグループごとに点数を競い合うかたちでクイズが進められた。その後、単語のワークシートに取り組んだ上で、本文に入った。教科書の本文読解は、CDを使って本文を聴いた後、英語で内容を問うQ&Aを行って、確認をするという方法で行われていた。



グループ対抗クイズの問題。この課の新出単語“evacuation”が答え（C校）。



単語ワークシートをやっているところ。問題は80問もある。韓国語で書かれた単語を英語にしていく（C校）。

生徒の授業への参加度

最後に生徒の様子を紹介する。英語で授業が進められており、スピードも速いことから、生徒たちが集中して授業に向かう姿がみられた。また、見学した授業のすべてに、ペアワーク、または、グループワークが設定されており、クラスメートと協力して積極的に課題に取り組んでいた。

以上、調査対象校での授業見学をもとにソウルでの高校の英語の授業の様子を紹介してきた。これまで日本に比べてかなり厚い英語の教科書を、どのように授業で使っているのか、どうやって終わらせているのか、疑問としてあげられてきた。1時間の授業見学のみでは、その回答を出すことはできないが、大意把握による本文読解や、80問もある単語のワークシートなど、限られた授業時間で、どうやって厚い教科書の内容をカバーしているのか、そのヒントはみられたよう思う。新学年の開始時期にもかかわらず、インタビュー、アンケート調査への協力のみならず授業見学も許可してくださった調査対象校に感謝したい。



答えがわかったグループから積極的に手が挙がる（C校）。



4人1チームでグループワークをしているところ。関係代名詞を使ってできるだけ長い文章をつくる（D校）。

補足：教科書について

以下、教科書について補足を加える。今回授業を見学したA校、C校、D校で使用していた教科書は、表3のとおりである。3校とも違う出版社の教科書を使っているが、頁数・課数は、ほぼ同じである。

表3：教科書の頁数・課数
(A校、C校、D校で使用のもの)

	A校「英語」	C校「英語Ⅰ」	D校「英語」
頁数(頁)	320	328	308
課数(課)	12	12	12

また、表4、表5は、D校で使用の「英語」の教科書とC校で使用の「英語Ⅰ」の教科書の1課の構成をまとめたものである。1課はだいたい20ページ程度で、“Listen and Do”、“Wrap-up Activity”などの活動（活動の名前のつけ方、ページの配分は教科書によって異なる）が、本文の前と後に組み込まれているかたちになっている。

表4：1課の構成
(D校で使用の「英語」の教科書)

		頁数(L2)*
Pre-Reading Activities	Learning Goals	1
	Listen and Do	2
	Talk and Practice	2
教科書本文		4
Post-Reading Activities	After You Read	2
	Writing Tasks	1
	Project File	1
	Summary & Practice	4
	Optional Activities	1
	Enjoy Your English	1
*頁数はLesson2のもの。		19

表5：1課の構成
(C校で使用の「英語Ⅰ」の教科書)

		頁数(L2)*
Pre-Reading Activities	Listen and Do	2
	Speak and Act	2
	Before You Read	1
教科書本文		5
Post-Reading Activities	After Your Read	2
	Write and Express	2
	Wrap-up Activity	1
	Study Points	2
	Review and Discuss	2
	Go Over	1
	Go Ahead	1
	*頁数はLesson2のもの。	

2. 小学校訪問レポート

中丸 満

本調査では、高校でのインタビュー、アンケート調査に加えて、韓国の英語教育全体の現状の情報収集の一環として、ソウル市内の小学校を訪問し、英語の授業の見学を行った。ここではその内容を報告する。

1997年に小学校での英語教育を必修化

韓国的小学校英語は、1981年に小学4年生以上を対象にした特別活動として始まった。その後、1994年の世界貿易機構（WTO）加盟をきっかけに、世界化政策の一貫として英語必修化が具体化され、1997年に小学校の3年生から正規の必修科目として導入された。

韓国における小学校英語のねらいは、大きく二つある。一つは、児童が日常生活にお



ヨンジ小学校外観。クラス数は2・6年生各2クラス。ほかの学年は各3クラス。共働き家庭の児童を対象に、放課後や長期休暇などに学校を開放、補習やレクリエーションを行い、教育格差の解消に努めている。

いて使用する基礎的な英語を理解し、表現する能力を育てること。そのため、授業は歌やチャンツ、ゲームなど、遊びを中心とした音声言語教育が中心だ。文字言語教育は、やさしく簡単な内容の文を読み、書くことのできる内容にとどめ、それも音声言語と連携した内容で構成されている。

二つめは、英語に対する興味・関心を持続的に持たせることである。韓国では、小学校から高校まで一貫した英語教育カリキュラムを整備している。小学校英語を導入段階と位置づけ、英語に対する親近感と自信を培うことで、中学校、高校において積極的に英語学習に取り組む学習態度を養うのである。

全校共通の国定教科書を使用

今回、訪問したのはソウル市郊外にある公立のヨンジ初等学校（以降、ヨンジ小学校）。同校のある地区の保護者の経済力は決して高いとはいえない、と校長は話す。私教育を受ける子どもはほとんどおらず、学校だけがほとんど唯一の教育機会であると言う。もっとも、同校はソウル市肝いりの教育重点校であり、教員や教育サービスの質は相対的に高い。創立は1998年と新しく、鉛筆

を連想させる時計塔、パステルカラーで縁取られた窓枠とレンガで装飾された、清潔感のある校舎が目を引く。

ヨンジ小学校では、4・5年生の授業を見学させていただいた。韓国的小学校での英語の授業時数は、3・4年で週1時間（年間各34時間）、5・6年で週2時間（年間各68時間）だが、ヨンジ小学校では、さらに学校裁量により各学年でプラス週1時間、および2年生で放課後授業を利用して週1時間の英語教育を実施している。

教科書は他教科同様、国定教科書が用いられる。3年生では聞く、話す活動を中心に行う。教科書をみてみると、指示に関してはタイトルのみ「Look and Listen」「Let's Play」など英語が使用されているが、詳細な指示は韓国語である。内容はチャンツや歌、ゲームなど。4年生では、聞く、話す活動を中心にながら、アルファベットや基本単語を掲載し、基本的な名詞の読みを行えるようになる。5年生になると、基本単語の読み、書きの練習を行う。チャンツや歌は文章を英語で示すが、習得については単語レベルにとどめる。6年生では文章までを扱い、4技能を総合的に指導する。文法は現在形や未来形、不定詞など、日本の中学校2年生レベルの事項も取り扱う。教科書には、全学年とも、絵や数字のカードが添付されており、切り取って使えるようになっているのもユニークだ。

評価は原則として数値化せず、記述式の評価が用いられる。ヨンジ小学校では年2回

のテストを実施しているが、これも個人の伸びを確認するためのものであり、通信簿には記録されない。あくまで児童が英語に慣れ親しむこと、興味・関心を伸ばすことが主眼であり、評価はそうした態度を養うための刺激の一つであると位置づけられている。

ゲームや歌で興味関心を引き出す

ヨンジ小学校の授業は、専科教員とネイティブのALTとのチーム・ティーチングで行われる。同校では専科教員は全教師の持ち回りで、必ずしも英語に堪能な教師が行うわけではない。韓国の中学校では、ALTは各市・道の教育委員会などの予算で招かれ、住居も提供される。同校が属する北部教育庁では、全65校のうち5割強の学校にALTが配属されていると言う。

同校の英語授業は、専用の英語教室で行う。この日、4年生は天気をテーマにした授業を展開していた。ALTが「Do you know the weather tomorrow?」と問い合わせる。



天気に関する単語を、朝鮮半島の地図を用いて説明する。専科教員が適宜、母語で補足するなど、ALTとの連携もよくとれていた。

第2章 現地レポート



韓国の強みであるICTを活用し、児童の興味関心を刺激する。音楽やアニメーションなどを駆使し、楽しく学ぶ工夫がもりこまれている。

児童は黒板の絵をみながら「rainy」「windy」などと答える。手を使つたしぐさで雨や雪を表現させたり、歌を歌わせたりするなど、五感をフルに使って英語に親しませる。

4年生ではアルファベットの習得にも取り

組んでいた。教室の前に設置されたモニターをみながらビッグAからスモールzまでを何度もリピートする。習い始めだからであろうか、ALTが先に言わないと口にできない児童も多く、教員の問いかけに対してもすべての児童が手を挙げることはなかった。

スピーチングでの練習が終わると、児童はテキストでスペルの確認を行う。Aとa、Bとbなど大文字と小文字を線でつないで、組み合わせを体で覚える。

専科教員とALTとの連携

5年生では、ピクチャーカードを使って基本単語のスペルの習得を行っていた。黒板に貼り付けられた机やイス、窓など6種類のイラストの横に、児童が「desk」「window」など



机に並べられたカードを取るゲーム。頭の上に手を乗せてALTの合図を待つ。



テキストのワークに取り組む4年生。大文字と小文字を結びつけて組み合わせを覚える。ICT教材と同じイラストを用いて連動性を高めている。

スペルが書かれたカードを貼り付けていく。

回答がすべて出揃い、ALTがひとりひとりピートした後、今度は同じ単語について、カードを使ったゲームが始まる。児童はそれぞれ机の上にイラストを描いたカードを並べ、両手を頭の上に乗せる。ALTが「door」「chair」などと発話すると、すばやく該当するカードを取る遊びだ。

ゲームが終わると、テキストに向かい単語の復習に取り組む。散りばめられたアルファベットを、該当する単語のスペルになるよう線で囲んでいくものだ。使用する単語は先ほどと同じ、イスや窓などの6種類。ゲームやテキストなど活動の内容を変えながら、同じ単語を何度も反復することで確実な定着を促す。

終業のベルが鳴ると、教室の二つの出入り口に、それぞれ専科教員とALTが立ち、一人ずつ、その時間に習った表現をリピートさせる。授業内容の定着を確認するとともに、児童自身に授業を通して身につけてほしい事項を意識させるためであろう。

4・5年生とも、ゲームや活動の説明こそ母語で行うものの、日本で行われているALTの共同授業に比べても、使用する英語の量は圧倒的に多い。児童もしっかりと声を出しており、前に出て発表するときも、恥ずかしがらずに発話する。ペアワークにも積極的に参加していた。

専科教員とALTの連携もスムーズだった。必要に応じてテキストのワークにも取り組ませるが、それが終わり、再び活動に入ったり、モニターを注視させるときは、その都度テキストを机の中にしまわせ、次の活動に集中させる。個々の活動のねらいや手法を専科教員とALTがしっかりと共有している様子がうかがわれた。

研修の充実で授業の質を保証

1997年に英語が必修化されたとき、韓国的小学校現場では教員の間に目立った混乱はなかったといわれる。20年以上におよぶ英語教育の実績があったことに加えて、研修体制が整えられていたからだ。小学校教員を対象として120時間の研修を実施、すぐれた力量をもった教員に対しては、さらに120時間の「深化研修」が実施された。例えば、ソウル市では、1997年度は「基本会話」「深化会話」「国外研修」の3種類であったが、漸次、改訂・補強し、2002年度以降は毎年8~9種類の研修が実施されている。1996~2006年度の10年間に研修を受けた小学校教員は、ソウル市だけで延べ3万人弱に達するという。

第2章 現地レポート



授業終了時には、一人ずつ授業内容を反復させる。4年生は天気カードを使って、単語の確認を行っていた。

小学校教員を養成する教育大学においても、すべての教員が英語の指導を行えるよう に1996～1997年に英語教授法を学ぶ「英語 深化課程」が設置された。採用試験では英語 インタビューが課されており、英語を教えら れない教員は教壇に立てないと言っても言 いすぎではない。

もっとも、授業の質が教員の英語力によっ て左右されることのないよう教材も工夫され ている。教科書には内容と連動したCD-ROM が無償で児童に配付され、あわせて教師用の 指導書と指導用CD-ROMも用意されている。 研修制度を整えるとともに、指導用ソフトを 充実させることで授業の質を保証しているの

である。

10年前、英語を必修化するにあたって、 反対派からは「中学校の英語教育にも課題が 多いのに、小学校で行っても解決にならな い」「母国語の理解も完全ではない段階で英 語を教えれば、国家観の獲得の障害になる」 といった問題点が提起された。それに対して 賛成派は、グローバル社会における英語の重 要性、早期教育の効果などを主張した。賛成 派・反対派双方で活発な意見交換がなされた が、保護者を中心に導入に賛成する声が多数 を占めたという。

就職試験で英語のスピーキングテストや 英語面談を課す企業があることからもうかが えるように、韓国では、グローバル社会で活 躍するには英語の習得が必須であるとの認識 が社会全体で共有されている。教育政策の充 実はもちろん、英語に対する社会全体の意識 の高さも、現在の韓国の英語教育を支えてい るといえよう。ヨンジ小学校の授業からも、 その片鱗を十分にうかがい知ることができた。 小学校英語の必修化から10年超、韓国 の英語教育は着実に進歩を遂げている。

〈参考文献〉

權 五良 (Oryang Kwon: 研究責任者) 他 (2007) 『小学校の英語教育10年の成果分析による小・中学校 英語教育の活性化方案模索』大韓民国教育人的資源部 (株) ベネッセコーポレーション翻訳
文部科学省 (2005) 「韓国における小学校英語の現状と課題」中央教育審議会外国語専門部会 (第9回、 2005.11.11開催) 資料